

わたしは一本の木

よろこびは語りた

苦しみや悲しみからは目を背けてきた

そろそろ別れの時が近づいている

肉体の痛みと病からはどんなに目をそらそうとしても
だめだった

肉体は正直

考え、ことばを使う人間の営みは
時に不正直

読む 流れる みちる うすれる

沈黙を 眼差しを 表情を 息を

けんめいに隠されてきた

深い傷つきとやわな弱さが

誰かの頑なさをほどく

この一本の木に宿る生命はどんどん肉体から薄れてゆき

苦しみ、悲しみ、痛み、くやしき、怒り、笑い、冗談、ユーモア

ことばにされなかった

ただここに積もっていった時間の堆積物が

一気に 今、解き放たれて

なんとという自由とゆるしの印のような

真白き花を咲かせようとしていることか

想像以上にわかりあえない

そのことを知って 苦しみや悲しみや痛みが

大切な何かとつながる鍵

一本の木としての私の一生は

あたたかな土の中に帰っていかうとしている